

学校現場における スクールソーシャルワーカーの 常駐化に向けて

- 1.教育相談コーディネーター調査
- 2.教員のタイムスタディ調査
- 3.スクリーニング二次分析

※「常駐」とは、学校から見て「常に学校にいること」、
「緊急時に対応可能なこと」である。

研究代表者：山野則子

研究協力者：駒田安紀、橋本磨和、榎本久美子

スクールソーシャルワーク評価支援研究所

大阪公立大学 現代システム科学研究科 山野則子研究室

〒599-8531 堺市中区学園前1-1

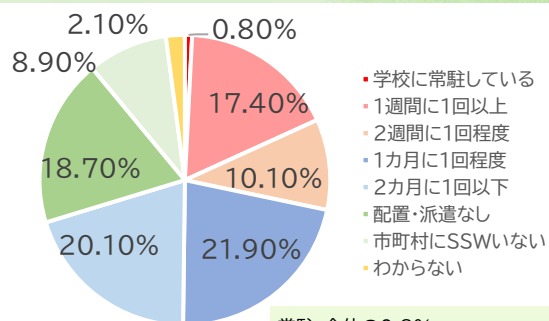
TEL 072-254-9783 (直通) ✉ gr-kyik-ebssw@omu.ac.jp

HP <https://www.omu.ac.jp/orp/ries-ssw/>



1. 教育相談コーディネーター調査分析結果概要 (N=4,927)

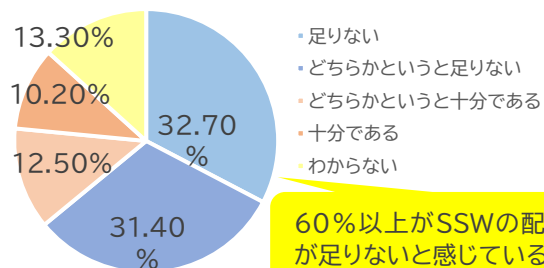
SSWの配置・派遣状況



常駐: 全体の0.8%
週1などの回数は学校からみた回数(勤務形態ではない)

SSWの活用率が低い項目においてもSSWが常駐していると
ころは活用率が高い！

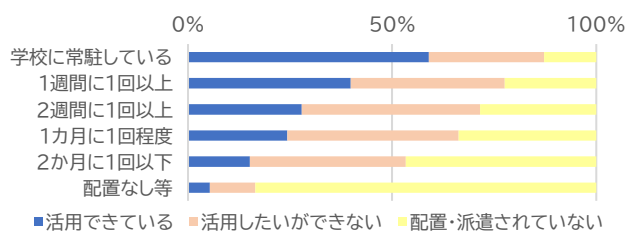
SSWの配置・派遣が十分と感じているかどうか



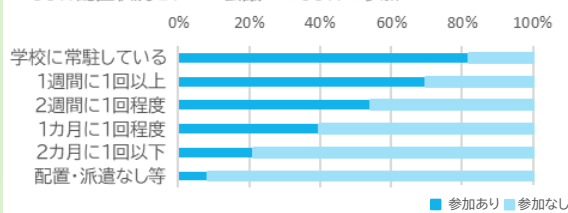
60%以上がSSWの配置・派遣
が足りないと感じている！

SSWが会議に出席するためには、
配置・派遣回数の充実が必須！
下記はチーム会議の例。

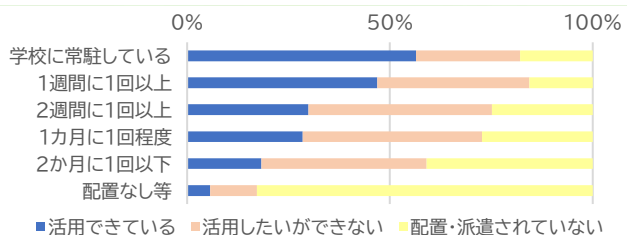
SSW配置・派遣状況と学校運営に関する会議の実施



SSW配置状況とチーム会議へのSSWの参加



SSW配置・派遣状況と学校と地域(民生委員やこども食堂など)
とのつながりづくりや交流



関係機関、地域の社会資源との連携や学校
運営に関する会議においてsswが活用され
ている学校では不登校好転率が高い！

不登校好転率(小学校)

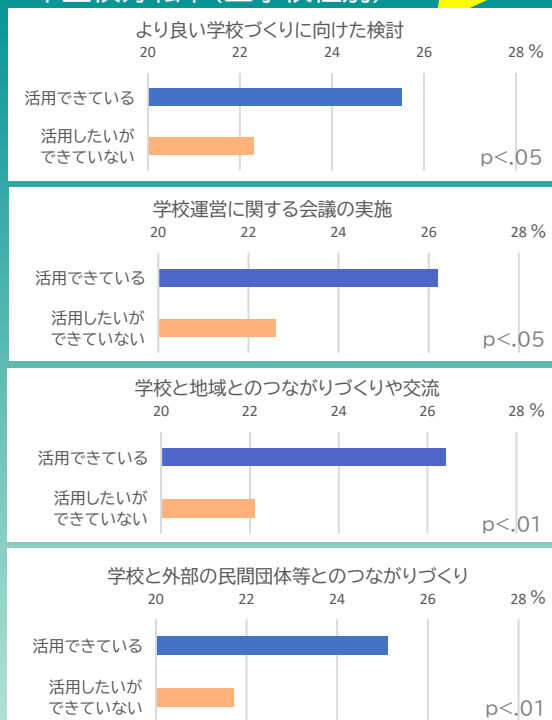


SSWが常駐している
学校では不登校好転率
が非常に高い！

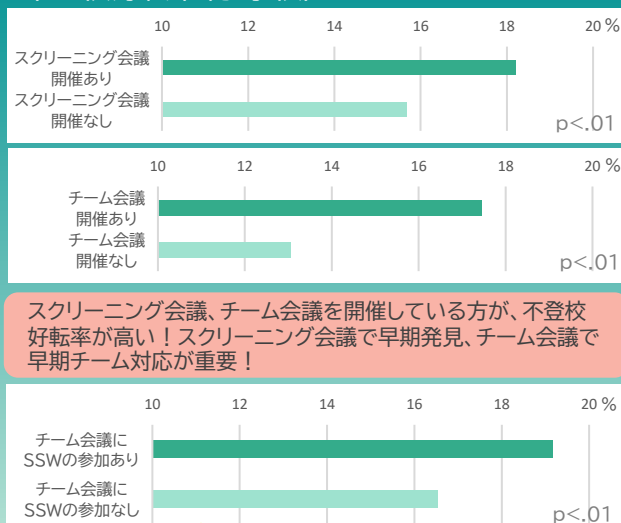
不登校好転率(中学校)



不登校好転率(全学校種別)



不登校好転率(小学校)



スクリーニング会議、チーム会議を開催している方が、不登校
好転率が高い！スクリーニング会議で早期発見、チーム会議で
早期チーム対応が重要！

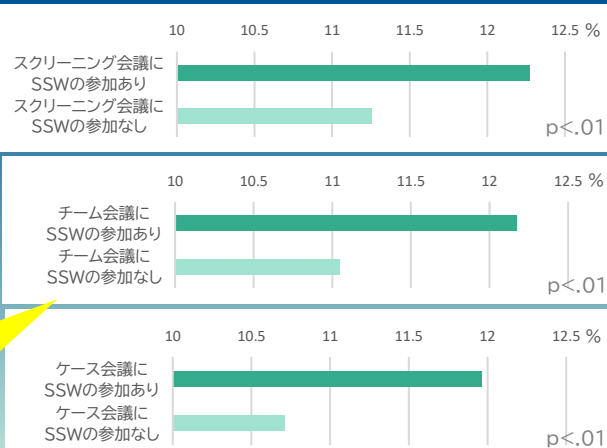
チーム会議にsswが参加している方が、不登校好転率
が高い！支援の方向性を決める場面にssw参加が効果を
発揮している。

開催状況	割合 (%)
スクリーニング会議 開催あり	11.6
スクリーニング会議 開催なし	10.9

p < .01

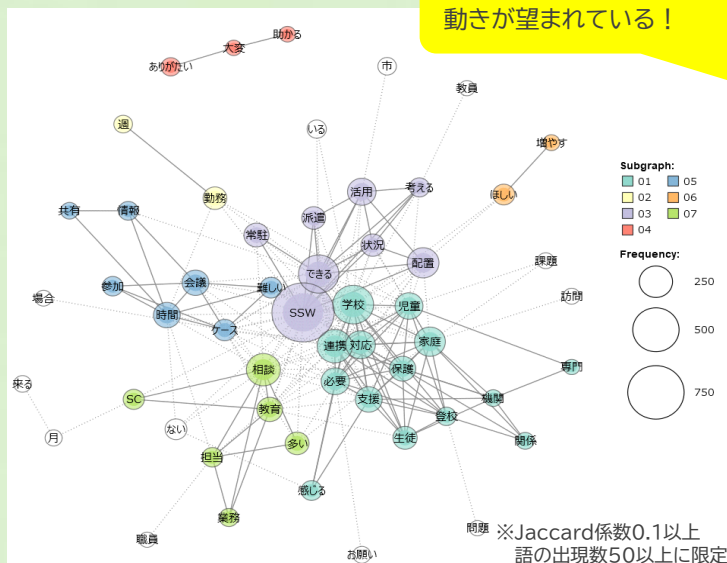
スクリーニング会議を開催している方が、就学援助利用率が高い！スクリーニング会議は、経済的支援が必要な家庭の発見を促進している！

3つの会議いずれかにsswが参加している方が就学援助利用率は高い！sswは経済面の評価という視点から発見機能を強化するとともに、具体的な支援方法を決定し家庭に必要な情報提供を行うことを可能にしている。



自由記述

今後、各校への常駐化に向けた動きが望まれている！

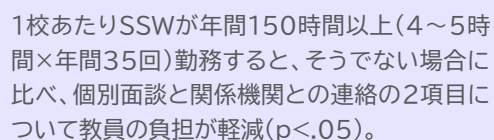
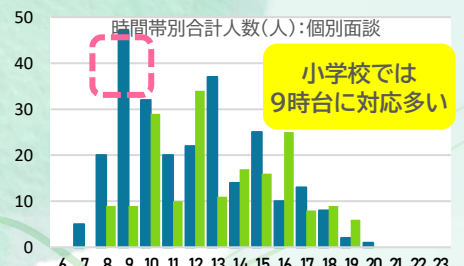
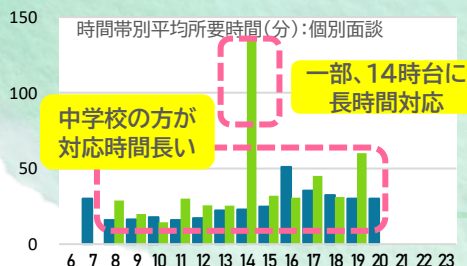
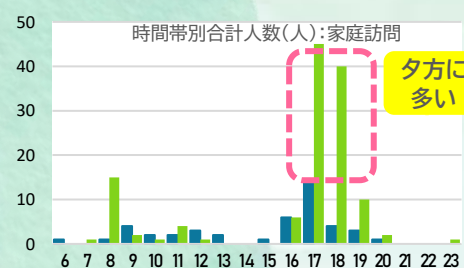
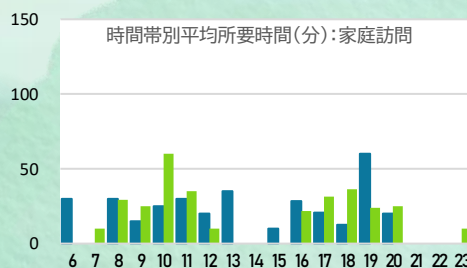
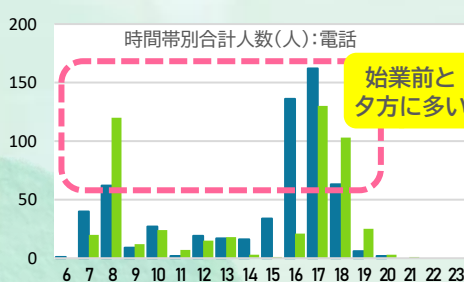


学校における教育相談業務やスクールソーシャルワーカーとの連携などについての自由記述の分析をおこなった(n=949)。同色で線で結ばれた語のグループを、原文を参照しながら解釈した。

- ▶「SSWの勤務頻度が少ない」と教育相談コーディネーターが認識している。
- ▶それにより、教育相談コーディネーターからSSWへの依頼や相談が困難になり、SSWの会議参加が少ない、必要な事例への対応が不十分という現状。
- ▶自治体に常駐をしているところであっても「学校に」常駐してほしいという声。
- ▶「常駐」という語が多く出現し、「常勤」は少ない。
- ▶SSWが来校すれば相談できる、事例に対応してもらえる。

2. 小中学校教員のタイムスタディ調査概要

28日間、事例対応のために動いた時間を教員自ら記録。



今回の調査で得られたスクリーニングに関する結果

3. スクリーニングデータ二次分析 ～スクリーニング新規導入校と継続校の比較～

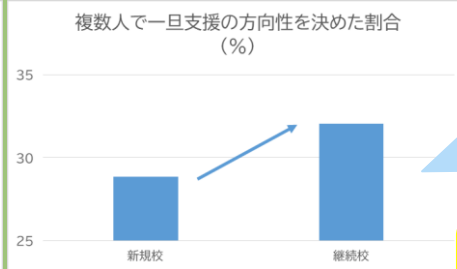
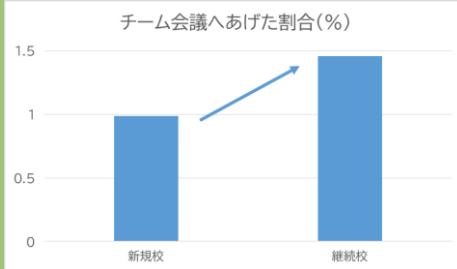
<分析概要>

スクリーニングとしてYOSS※の新規導入校(1年未満)と継続校で以下の2つを比較

- 「チーム会議にあげた割合」
- 「複数人で一旦支援の方向性を決めた割合」

<分析対象>

- ◆ 2023年度、スクリーニングを実施していた1自治体の公立小学校
- ◆ 新規導入校(28校・12,562人)と継続校(14校・4,731人)
- ◆ 分析には2023年度2学期のスクリーニングデータを使用

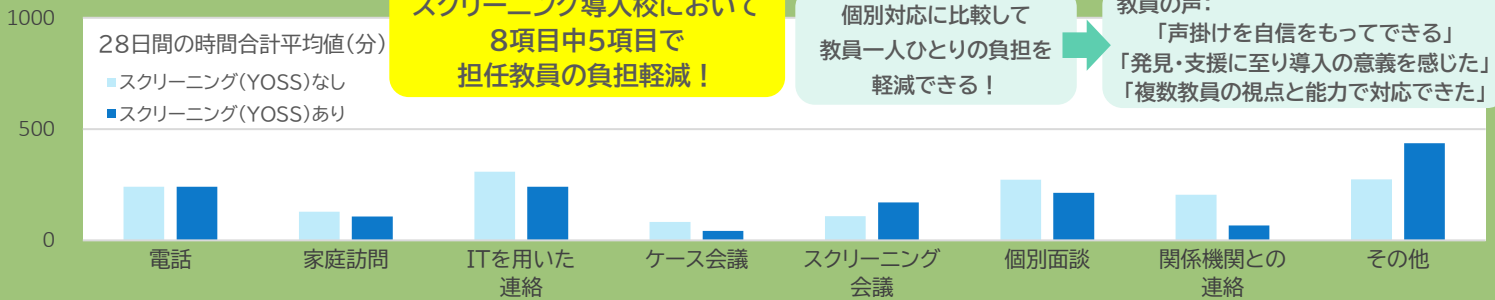


カイニ乗検定の結果、スクリーニング継続校のほうが、新規導入校に比べて・・・

- 「チーム会議にあげた割合」が有意に大きかった($p<0.05$)。
- 「複数人で一旦支援の方向性を決めた割合」が有意に大きかった($p<0.05$)。

スクリーニングを継続することで
教職員の中に福祉的な視点が広がっていく

2. タイムスタディ調査より ～スクリーニング導入校と非導入校の比較～



スクリーニング導入校において
8項目中5項目で
担任教員の負担軽減！

個別対応に比較して
教員一人ひとりの負担を
軽減できる！

教員の声:
「声掛けを自信をもってできる」
「発見・支援に至り導入の意義を感じた」
「複数教員の視点と能力で対応できた」

※YOSS (Youngsters' Obstacles Screening System)とは
「子どもの最善の利益のために、すべての子どもを対象として、問題の未然防止のために、データに基づいて、潜在的に支援の必要な子どもや家庭を適切な支援につなぐための迅速な識別」であり、つまり「1人で単に子どもの実態をチェックすることではなく、**チェックしたデータに基づき複数人による議論**から実行可能な暫定的な方向性を決定すること」(文部科学省「スクリーニング活用ガイド」)



本調査でみてきたSSWの効果的活用モデル

配置

- 正規職員化:
学校常駐・長時間配置
- 緊急対応可能な体制

活用

- 学校運営に関する会議に参加
- 学校と地域とのつながりづくりに活用
- スクリーニング会議に参加

効果

- 不登校の好転
- 就学援助の利用増加
- 教員の負担軽減

効果的な活用のために

- 政策として、SSW増員・時間確保
- SSW自身のマクロ実践力の向上
- 学校側のSSW認識改善
- 連携の仕組みの見直し
- SSW担当教員の校務分掌上の位置づけ